
個別化の暗部

～資源としてのグループを失う

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 012

千葉 晃央

大泣きした友を…

ある保育園のドキュメンタリーをみました。保育園の遠足の道中のある場面で泣いてしまった子がいました。その保育園ではあえて、行事で少し険しい山道を選んで移動をしていました。その子は、どうしても小川にかかる一本橋が怖くて渡れません。泣いて、泣いて、先生や友人に励まされて、何とかわたりきりました！…と思ったとたん後ろにバランスを崩して、小川にポシャ

ーン！もちろん小川なので濡れるぐらいで済みました！（と考えている保育園さん）でも、その子は落ちたことが気になって、その場に泣いて立ちすくみます。でも、行事の目的地があるので、みんなはどんどん歩いて先に進みはじめてしまいます。どんどん離れていくみんな。それを後ろから眺めながら…でも、まだ自分からは動くことができない…。みんなの背中はどうだん遠くになっていきます…。

そこに一人の友人が走って戻って来ます。



「大丈夫？」
「…」
「遅れちゃうよ」
「…」
「たいへんやったね〜。」（と泣いている子の背中をなでる）
「…ふん…」
「いこっ!」（泣いている子の手をつないで、引っ張って走り出す）
「…うん」（といいながら一緒に走っていく）
その姿を、少し前に行きながらも、何度も振り返りさげなく様子を見ている先生がいました。後で、その場面での心境を尋ねられた先生は
「お互いに助け合い、友達を信じることな
んかが伝えられたらいいと思っています」と話していました。よく手を出すのを我慢して待つことができている姿勢がとても印象的でした。

わかる人にはわかる？

「もっと優しく、たくさん利用者の方に関わってほしい」これは大学等の実習生や施設見学者が、障害者の働く施設に来た時に時々聞こえてくる感想です。しかし、毎日接している援助者には、日々の関わりの中に意図があります。

しかし、実習期間、施設見学という立場の人が、少しみただけでは、そういうところまでの理解はしてもらえません…、と言い切ってきたのが以前の姿勢でしょう。現在、現場では、そういう方々にも誤解を与えないよう苦心しています。

平成 24 年 10 月には、障害者虐待防止法が施行されました。虐待の定義の中には、心理的虐待として無視、放任として「ネグレクト」があります。そのネグレクトと「関わらないという関わり」が「明確に異なる」ということは、援助職なら誰でもわかります…と言い切りたかったのですが怪しくなってきました。

利用者をグループとしてとらえて、グループメンバーも資源にして関わるのがグループワークとされてきました。前回の連載でもふれたように福祉に関する専門職教育においてグループワーク等のグループを学ぶ機会はすっかり減ってしまっています。

証拠化する支援の記録

「証拠化する介護記録」狭間香代子氏（関西大学）の冊子が私のデスクにはあります。

「サービス提供記録」となった「ケース記録」に対する批判は、近頃よくきくようになりました。この利用者の方に対して、援助機関、施設は何を提供したのか、その記録が中心になってきています。これは、支援を提供したという証拠を作ります。それに基づいて、行政に請求を行います。そして何かトラブルが起こっても、アカウントビリティを経た上での、利用者の同意と記録という（書面上の）証拠があれば大丈夫であるというリスクマネジメントにつながります。アカウントビリティ、リスクマネジメントもここ 10 年強で福祉現場に定着した言葉です。

その一方でここ 10 年と少しぐらいで消

えていったのが、グループをみる視点、グループワークに関する視点です。蝶々結びが苦手な利用者の方は、他の利用者にしてもらう。電気はAさんが消してくれる。洗濯はBさんがしてくれる。職員が声をかけても伝わらないけれども、利用者仲間が声をかけると伝わる…。このようにお互いが相補的に、相互作用を持ちながら日々の実践が積み重ねられているのが知的障害者の労働現場です。

その中で個人のところだけを切り取ってスポットを当てているのが今の個別支援計画です。現場で起こっていることの中で、大きく取り上げていない部分があるのです。他の利用者からの関わりも、その人の今ある日常の力につながっていることは確かです。援助者が意図した支援という直接的な関わりだけでできている「現状」ではありません。

他者の力を借りる

「本人自身ができなくても友人の力を借りることのできるようになれば、まずは一歩前進じゃないか」という意見もあります。このようなことは、個別支援計画書にはなかなかそぐわない視点です。他の利用者の関わりを引き出すという力も、実際の生活を考えると生きていく重要な力の一つに思えます。

そういった相互作用が生まれながら、利用者集団というグループの成長を助長していくのが援助職の役割と従来はされてきました。

個別対応の暗部

利用者が一日の過ごし方を選択していくということが進み、利用者の自主性や満足度が重んじられるようになってきているという流れには以前触れました。希望に耳を傾け、それに対して可能な限りこたえていきます。それは進歩といえるでしょう。

ただ福祉現場では、同じ施設に通っていても別々の日課を過ごしているということが増えました。それまで、施設に対する代表的な批判の一つに、様々なニーズを抱える利用者を同じ日課で画一的なサービスをしているのはおかしいのではないか！というのがありました。

それはそれで負の側面があり、改善すべきものがありました。ですが、個別レベルでは充実ですが、これを利用者集団としてみるとどうでしょうか。

開放集団・閉鎖集団

参加者がいつでも新しく参加できる、途中参加もできるオープングループ（開放集団）では、新しい人間関係の形成、参加のしやすさ、新鮮さという特徴があるといわれています。一方、メンバー間の力動的な作用は希薄になります。クローズドグループ（閉鎖集団）は凝集性が高まり、グループが成熟しやすく、関係性も安定化するとされています。一方、関係性の固定化、

考え、意見が限定されて柔軟性がなくなるともわれています。

これらを踏まえて、知的障害者の労働現場をみてみると、私のまわりでも、本人の希望を聞いて一日の流れを決めているところが多いです。朝はこの作業、昼からは別の作業場で、また別の仲間と過ごします。一日同じ作業の人もいることはありますが、まわりのメンバーはかわります。曜日によってどこで誰と作業をするのか？が変わることもあります。

こうしてみますと知的障害者の労働現場での利用者集団は「開放集団」に以前よりも近づいたように感じています。その特徴として、力動的な作用が希薄になったことが前述のとおりあげられます。

葛藤回避を優先

この現状はいかがでしょうか。以前より、利用者にとっては自分で決めたことをする日々を選んで過ごしています。これは素晴らしいことです。

支援する側にとってはどうでしょうか。午前中に起こった出来事で受けた利用者の心の影響や関係性の影響が、午後にはリセットされることが増えたというのがあります。人間関係での葛藤は少なくなったといえるでしょう。正に力動的な作用は希薄になってきている印象があります。

援助者の関わりは「葛藤」に対する関わりという部分では減ったかもしれませんが、しかし、グループにおける葛藤を短絡的に

表面だけをとらえ、避けるべきではないとグループワークではいわれてきました。その葛藤から自分を見つめ、他者を見つめ、学んでいくきっかけとされてきました。

グループ葛藤も資源にしながら、援助者は更に関わってきました。話し合い、ユーモア、配置の工夫、グルーピング（グループ分け）の工夫、ケースでの対応、家族との連携…たくさんのチャンネルが用いられてきました。そこでは、あくまでそのグループの目的、個別の目的に沿うよう最大限に努力することが援助者には求められています。

知的障害者の労働現場であれば、その目標は、収入であり、社会参加でもあります。同時に一般就労に向けた練習の場でもあって、その各目標に沿って考え、関わりを工夫していきます。それが知的障害者の労働現場でのグループワークです。

また、援助場面では、常に援助者から援助が提供されるという固定化した構図も依存を助長する側面があります。やはり人は友人の手助けも受けながら生きていくということは自然です。それも織り込み済みで扱えるよりも支援の質が向上するのではないかと考えています。

「いじめ」が私たちに問うもの

グループを生かす視点、グループの力を生かす制度もなく、グループに関する視点

を養う援助職教育も失われたように感じます。もしかすると苦手で避けた？と言えるのではないかと考えています。

そんな今起こっているのが「いじめ問題」です。グループの力動抜きには語ることはできません。

の不足はよく指摘されますが、グループを意識した専門的な関わりという側面は、しっかりと先人から引き継がれているものがあるのではないかと考えています。私たちがいう専門性とはなんなのか？…ということを考えた保育園のドキュメンタリーでした。

幼児の支援に関わる現場における専門性

(写真: 橋本総子)

